ふじみサラダボール子育て情報

「幼児期の感性」

令和５年１１月２２日号

板橋富士見幼稚園

世界でもっとも美しい国

人は、毎日当たり前の暮らしを続けていると、生活の中の美しさや喜びに気づきにくいものです。子ども達も同じ感覚ではないでしょうか。

日本は世界でもっとも美しいといわれることもあります。この国の美しさを感じる心は、一体だれがつくっているのでしょう。それは、お母さん達かもしれません。

日本では、一人一人の感性を育てる教育がなされています。道徳性（しつけや規範）を基盤に、子ども達の感性を豊かにする土壌が昔からあります。

まず挙げられるのは、四季と共にある食卓です。世界ではっきりと四季のある国はそうたくさんありません。また、食卓に美しさを求めることに、あまりこだわらないようです。日本では、その季節ごとに収穫される“旬”とされる野菜や果物が食卓にたくさん並びます。昔から季節のもので食卓を彩るために、お母さんたちの豊かな感性や表現力が発揮され、それが子どもの心も自然と動かしてきました。また、田畑や茶畑などの美しい幾何学的な風景は、作業の利便性だけではなく、美的な感性を刷り込んでいます。

このような彩りや並べ方へのこだわりのルーツは、平安の時代から受け継がれた作法や、季節の美しさを言葉や歌で表現するという感性からきているものです。食卓やお弁当の彩りをはじめとして、田園や畑の幾何学的美しさ、茶道や懐石の彩り、四季折々の景色の移り変わりなど、日本の美しさは文化でもあり、知らぬ間に人から人へと受け継がれ、身近な生活の中にその美しさが浸透しています。そうした積み重ねが「美しい国」を創り出しているのだと感じます。

この彩りを子どもと一緒に作りあげたり、感じたりしてほしいと思います。そして、美しいものを美しいと受け止められる、感性豊かな子どもになってほしいと願っています。

【１２月の作品展にむけてイメージを膨らませながら製作活動を楽しんでいます。】